

居合道の芸術性について

福 井 勇*

Some Artistic Aspects of 'Iaido'

Isamu FUKUI

(1976年9月27日受理)

前 書 き

近来徐々にではあるが、居合道を修練する者が増加していることは居合道を愛好する者にとっては大きな喜びである。現在居合道は一部の流派を除いては全日本剣道連盟組織内の一分野に位置づけられているが、居合道と剣道とのスポーツ性等の関連やその違い等については、成書類には理論的に説明されていないので、所謂の剣道人の多くは居合道について確固とした理念に乏しく、中には明治時代以後強調された日本精神や武士道精神を基調とする考え方をしている者が多いのではないかと考える。

筆者は居合道については、この練習のための筋肉運動は一般保健体育上から見たスポーツとは縁遠いように考えるし、またスポーツ性の有無の論よりも別な観点に立って居合道が芸術性と密着しているその性格を重大視している者である。

このように述べて来ると剣道界の中から居合道が芸術であるとはそもそも論外であり、武道を冒瀆するものと厳しく反論される人が出ることも当然予想されるが、筆者としては甘んじて批判を受ける覚悟である。

然しながら近代に普及させるためには論理に無理があってはならないと思うので、筆者は本文のように居合道と芸術性との結びつきについて論理的に考えてみたのである。但し本稿はすべて古流の居合道を対象にしており、明治時代以後新設された抜刀居合術についてはその時代の背景があるうえに実戦剣法としてこの道の練達者多人数によりその形を制定されたものと承知しているので、この居合術については理論的には全く別な観点から考えることが自然であり、本文の芸術性との密着についても異なる性格であると考えているのでこの種居合術に関するものは除外して論述することにした。

1. 総 論

(1) 居合道の由来と近代的な考え方

刀剣創作の歴史は日本においても古いが、刀剣使用法の創作となると鎌倉幕府より以前においては文献での発見は困難である。個人的に体力が勝れ刀剣での突き、または斬る動作が機敏な者でその用法に巧みな所謂の剣豪に属すると思われる者は物語り的には散見できるが、刀の用法上の一派として後世に伝えられている者は一部といってよく、鎌倉幕府に至って武士階級として組織統制づけられるに従い¹⁾剣の用法が研究工夫されて来たといえよう。居合道が剣の用法上抜刀術として創作されたのが元龜・天正の時代であり、奥州の

* 保健体育研究室

人林崎甚介重信がその始祖とされている^{7),10)}のは正しいと考える。以後この抜刀術を基本として各流派に分かれ夫々の所謂の流祖によって居合術が創作され伝承されて今日に至っているわけである。従って剣の用法が当時剣術であったかぎり、居合術なるものが剣術と表裏一体のものであったことは当然のことである。

明治二十八年剣術が剣道と呼称されるに及び⁹⁾、居合術も当然居合道として現代に至っているのであるが、茲に着目せねばならないことは第二次世界大戦終結の昭和二十年八月十五日以後日本武道が禁止されたことであった。然しながら各界の努力により日本武士道の発露とまでいわれた剣道は数年後には形式的には竹刀競技として再発足し、以来幾多の変遷はあったが、二十数年を経た今日では技術的に概ね戦前の剣道に立ち戻った感じである。特に近来青少年の愛好者は流行的と思われる程殖え続けており、居合道においても剣道人口の増加とは比較にならないが漸増していることは事実である。

剣道についての近代的な考え方やその在り方については筆者が既に本誌¹³⁾において述べたが、スポーツとして近代的脚光を浴びている剣道と関連して居合道についてはどのように考えればよいのか、論理的にも検討すべき重要な時機に来ていると考えられる。居合道の試合規則が昭和四十八年制定されたが、元来日本刀の用法技術であるから剣道のような双方打突試合は勿論不可能であり、このこと自体剣道とは完全に特異性を示している。居合道としては竹刀を代用して試合すること等は到底考えられないし、本質的に不合理且つ無意味となることは論ずるまでもない。結論的に筆者は居合道においては日本刀を用具とした芸術的観点に立った論法が近代的には適切ではないかと考えている。

(2) 芸術との密着性

首題を居合道の芸術性とした以上、芸術とは何かという問題に直面するわけであるが、芸術そのことについて筆者は専門外であり、常識的解釈に過ぎないが、文献に徴しても芸術なるものの定義については明確に断定され得ないのではないかと感じていると同時に哲学でもなく科学でもなく宗教でもなく、ましてや魔術でもない芸術の持つ深い内容に心を打たれている者である。そして居合術については創作された一種の形式を真理として表現する以上居合道は芸術の分野に入るものと確信するのである。

絵画、写真、彫刻、建築、陶芸や諸細工、あるいは音楽舞踊、詩、小説、劇、映画等は一般に理解度が高いので、これらは芸術分野に属するといわれているが¹²⁾、居合術についてはその名称すら知らない者が多い現代であるので、これを芸術範囲に採り上げなかったに過ぎないものと解釈したいのである。

居合術は生きた形式である以上、前記諸芸術と同一要素が内蔵されているものと考えられる。特に筆者が興味を覚えるのは舞踊という芸術であるが、優れた舞踊は物用具を使用して物質以上のものを創作するということである¹²⁾。この迫力は筋肉力だけではなくて神秘的な現われを見せるのであるが、このことは居合術と全く一致するものと筆者は考えるのであり、神秘的な現われを見せること即ち、[〃]虚[〃]の実在ともいい得られるのではないかと判断する。

そしてこの[〃]虚[〃]の空間分野に至るには修練要素が重大な役割であると考えられるが、何れにしてもこのような創作に対しては居合道において筆者は完全に芸術感に襲われるのである。何が芸術作品かとは誰もが断定し得ないであろうが、芸術の原理は、感じ取り得る表現形式である以上、居合術はまさに芸術であると結びたいのである。

2. 技法の特性と芸術性

(1) 日本刀による用法

芸術では何かどのようにして創作され形式具現されているかをよく問われるようであるが、居合術技法の大方の基本は簡単に表現すれば、相手の殺気を事前に素早く察知して攻撃される瞬間に、守勢から一転して「先」を取り自分の日本刀を用いて相手を斬突するということである。伝承されたこのような技法を完全に体得することは至難というより不可能とも思われるが、特筆すべきことは居合術についてはその修練のために日本刀を使用するということである。

伝来の日本刀自体は我が国のまさしく芸術品であることには誰も異論は無いであろうし古来刀工は腕を競い合い、その有名な刀工の作品は現在にも名刀として香り高く生きているように感じられることは、その刀工の芸術人としての生命力が偉大で深遠なものであったといえよう。そして居合道に研鑽する者は誰もがこの芸術品を実際に使用して修練することを希い、または少くとも誇りに感じているのである。このことと同時に我々が考えねばならないことは、現代では日本刀なるものが実際に人間を斬突する危険なものとは最早や考えられないし、居合道の近代感覚としては日本刀の技法か武士道精神の発露であるというのみの硬直した観念であってはならないということである。ただ居合術が必殺行為につながる技法であり、仮想敵の動作を想定して一人で修練するので例えば茶道や華道とは趣を異にするが、日本刀は茶道や華道における用具類と同様視し、これを駆使するものと考えることが居合道においても論理上自然と思われるのである。

尚附記しておきたいのは、武という字句の意義が一部学問的に「矛、を収めることと説かれており、元来平和的な意味を持つていることに加え、居合動作も相手の攻撃から身を守るため已むを得ず行なう技法であると教えられて来たことである。

(2) 俊厳な鍛練

居合術は日本刀を用いる技法であるので、剣道の竹刀操作では許されるような安易性は全々無い。技法上特に重視されるのは「鞘はなれ、の瞬間動作、斬突の瞬間動作および「納刀、動作であり、日本刀の「重さと形」に応ずる完全な技法体得に精進せねばならないのである。日本刀操作の厳しさは例えば斬突する相手のその部分に対しては些かの狂いも無く瞬間の判断を要するし、斬り当てる日本刀刀身の部分は剣道における竹刀とは異り刀身の中央部分が原則であり而も「引き斬り、動作なのである。また柄を握る両手または左右の手の力の入れ具合も完璧でなければならず、刀刃の方向は特に些かの狂いも許されないのである。加うるに各種の技が「静と動」の体様の中で特別な「気剣体」の一致を要求されるのであるから誠に厳しいものであり、無限の努力が必要といわざるを得ない。またこのためにする平素の身体的鍛練も亦並々ならぬことは論を俟たないのである。

芸術の核心に至らんとする過程にあって、天才といえども修練が重要な要素であることには迷い無く、魔術でないかぎり忽然として芸術剣作品が生れるとは考えられない。古い時代から現在にその名を伝えられる優れた芸術家や、現存の各種高度の芸術家の人生を見聞しても、凡人の為し得ないと思われる努力に対し筆者は常に感嘆しているのである。

このような修練過程そのことは居合道においても芸術性があるといっても決して誤りではないと確信する。従って鍛練が厳しければ厳しい程芸術の核心に近づくものと判断したい。

(3) 無意識、無心の境地

芸術では無意識の分野が非常に多いといわれているが¹²⁾、我々がこの世界に直ぐ入り得ることは一般論的には不可能と考えられる。居合術は生死をかける技法につながるのであるから技法鍛練の深さも当然のことながら精神的には没我的な完全な集中力を要するので、その精神涵養の方法論は別としてその極地は無心でなければならないと考える。このことは芸術でいわゆる無意識の世界に通ずるものと判断したい。

居合道の始祖林崎甚介重信は修練のうえ、神社に参ろうして抜刀術を会得したと伝えられており¹³⁾、この抜刀術から分岐した各流派の居合道流祖も鍛練と相俟って、ある者は神社に参ろうし、ある者は流に打たれて自己の流儀を悟り、あるいはまた極端な非凡の鍛練の結果自己の技法を編み出したと伝えられているが、これらはすべて芸術でいう極地と通じ合うものと筆者は判断したいのである。

尚古くから¹⁴⁾、¹⁵⁾、¹⁶⁾、¹⁷⁾、¹⁸⁾、¹⁹⁾、²⁰⁾、²¹⁾、²²⁾、²³⁾、²⁴⁾、²⁵⁾、²⁶⁾、²⁷⁾、²⁸⁾、²⁹⁾、³⁰⁾、³¹⁾、³²⁾、³³⁾、³⁴⁾、³⁵⁾、³⁶⁾、³⁷⁾、³⁸⁾、³⁹⁾、⁴⁰⁾、⁴¹⁾、⁴²⁾、⁴³⁾、⁴⁴⁾、⁴⁵⁾、⁴⁶⁾、⁴⁷⁾、⁴⁸⁾、⁴⁹⁾、⁵⁰⁾、⁵¹⁾、⁵²⁾、⁵³⁾、⁵⁴⁾、⁵⁵⁾、⁵⁶⁾、⁵⁷⁾、⁵⁸⁾、⁵⁹⁾、⁶⁰⁾、⁶¹⁾、⁶²⁾、⁶³⁾、⁶⁴⁾、⁶⁵⁾、⁶⁶⁾、⁶⁷⁾、⁶⁸⁾、⁶⁹⁾、⁷⁰⁾、⁷¹⁾、⁷²⁾、⁷³⁾、⁷⁴⁾、⁷⁵⁾、⁷⁶⁾、⁷⁷⁾、⁷⁸⁾、⁷⁹⁾、⁸⁰⁾、⁸¹⁾、⁸²⁾、⁸³⁾、⁸⁴⁾、⁸⁵⁾、⁸⁶⁾、⁸⁷⁾、⁸⁸⁾、⁸⁹⁾、⁹⁰⁾、⁹¹⁾、⁹²⁾、⁹³⁾、⁹⁴⁾、⁹⁵⁾、⁹⁶⁾、⁹⁷⁾、⁹⁸⁾、⁹⁹⁾、¹⁰⁰⁾、¹⁰¹⁾、¹⁰²⁾、¹⁰³⁾、¹⁰⁴⁾、¹⁰⁵⁾、¹⁰⁶⁾、¹⁰⁷⁾、¹⁰⁸⁾、¹⁰⁹⁾、¹¹⁰⁾、¹¹¹⁾、¹¹²⁾、¹¹³⁾、¹¹⁴⁾、¹¹⁵⁾、¹¹⁶⁾、¹¹⁷⁾、¹¹⁸⁾、¹¹⁹⁾、¹²⁰⁾、¹²¹⁾、¹²²⁾、¹²³⁾、¹²⁴⁾、¹²⁵⁾、¹²⁶⁾、¹²⁷⁾、¹²⁸⁾、¹²⁹⁾、¹³⁰⁾、¹³¹⁾、¹³²⁾、¹³³⁾、¹³⁴⁾、¹³⁵⁾、¹³⁶⁾、¹³⁷⁾、¹³⁸⁾、¹³⁹⁾、¹⁴⁰⁾、¹⁴¹⁾、¹⁴²⁾、¹⁴³⁾、¹⁴⁴⁾、¹⁴⁵⁾、¹⁴⁶⁾、¹⁴⁷⁾、¹⁴⁸⁾、¹⁴⁹⁾、¹⁵⁰⁾、¹⁵¹⁾、¹⁵²⁾、¹⁵³⁾、¹⁵⁴⁾、¹⁵⁵⁾、¹⁵⁶⁾、¹⁵⁷⁾、¹⁵⁸⁾、¹⁵⁹⁾、¹⁶⁰⁾、¹⁶¹⁾、¹⁶²⁾、¹⁶³⁾、¹⁶⁴⁾、¹⁶⁵⁾、¹⁶⁶⁾、¹⁶⁷⁾、¹⁶⁸⁾、¹⁶⁹⁾、¹⁷⁰⁾、¹⁷¹⁾、¹⁷²⁾、¹⁷³⁾、¹⁷⁴⁾、¹⁷⁵⁾、¹⁷⁶⁾、¹⁷⁷⁾、¹⁷⁸⁾、¹⁷⁹⁾、¹⁸⁰⁾、¹⁸¹⁾、¹⁸²⁾、¹⁸³⁾、¹⁸⁴⁾、¹⁸⁵⁾、¹⁸⁶⁾、¹⁸⁷⁾、¹⁸⁸⁾、¹⁸⁹⁾、¹⁹⁰⁾、¹⁹¹⁾、¹⁹²⁾、¹⁹³⁾、¹⁹⁴⁾、¹⁹⁵⁾、¹⁹⁶⁾、¹⁹⁷⁾、¹⁹⁸⁾、¹⁹⁹⁾、²⁰⁰⁾、²⁰¹⁾、²⁰²⁾、²⁰³⁾、²⁰⁴⁾、²⁰⁵⁾、²⁰⁶⁾、²⁰⁷⁾、²⁰⁸⁾、²⁰⁹⁾、²¹⁰⁾、²¹¹⁾、²¹²⁾、²¹³⁾、²¹⁴⁾、²¹⁵⁾、²¹⁶⁾、²¹⁷⁾、²¹⁸⁾、²¹⁹⁾、²²⁰⁾、²²¹⁾、²²²⁾、²²³⁾、²²⁴⁾、²²⁵⁾、²²⁶⁾、²²⁷⁾、²²⁸⁾、²²⁹⁾、²³⁰⁾、²³¹⁾、²³²⁾、²³³⁾、²³⁴⁾、²³⁵⁾、²³⁶⁾、²³⁷⁾、²³⁸⁾、²³⁹⁾、²⁴⁰⁾、²⁴¹⁾、²⁴²⁾、²⁴³⁾、²⁴⁴⁾、²⁴⁵⁾、²⁴⁶⁾、²⁴⁷⁾、²⁴⁸⁾、²⁴⁹⁾、²⁵⁰⁾、²⁵¹⁾、²⁵²⁾、²⁵³⁾、²⁵⁴⁾、²⁵⁵⁾、²⁵⁶⁾、²⁵⁷⁾、²⁵⁸⁾、²⁵⁹⁾、²⁶⁰⁾、²⁶¹⁾、²⁶²⁾、²⁶³⁾、²⁶⁴⁾、²⁶⁵⁾、²⁶⁶⁾、²⁶⁷⁾、²⁶⁸⁾、²⁶⁹⁾、²⁷⁰⁾、²⁷¹⁾、²⁷²⁾、²⁷³⁾、²⁷⁴⁾、²⁷⁵⁾、²⁷⁶⁾、²⁷⁷⁾、²⁷⁸⁾、²⁷⁹⁾、²⁸⁰⁾、²⁸¹⁾、²⁸²⁾、²⁸³⁾、²⁸⁴⁾、²⁸⁵⁾、²⁸⁶⁾、²⁸⁷⁾、²⁸⁸⁾、²⁸⁹⁾、²⁹⁰⁾、²⁹¹⁾、²⁹²⁾、²⁹³⁾、²⁹⁴⁾、²⁹⁵⁾、²⁹⁶⁾、²⁹⁷⁾、²⁹⁸⁾、²⁹⁹⁾、³⁰⁰⁾、³⁰¹⁾、³⁰²⁾、³⁰³⁾、³⁰⁴⁾、³⁰⁵⁾、³⁰⁶⁾、³⁰⁷⁾、³⁰⁸⁾、³⁰⁹⁾、³¹⁰⁾、³¹¹⁾、³¹²⁾、³¹³⁾、³¹⁴⁾、³¹⁵⁾、³¹⁶⁾、³¹⁷⁾、³¹⁸⁾、³¹⁹⁾、³²⁰⁾、³²¹⁾、³²²⁾、³²³⁾、³²⁴⁾、³²⁵⁾、³²⁶⁾、³²⁷⁾、³²⁸⁾、³²⁹⁾、³³⁰⁾、³³¹⁾、³³²⁾、³³³⁾、³³⁴⁾、³³⁵⁾、³³⁶⁾、³³⁷⁾、³³⁸⁾、³³⁹⁾、³⁴⁰⁾、³⁴¹⁾、³⁴²⁾、³⁴³⁾、³⁴⁴⁾、³⁴⁵⁾、³⁴⁶⁾、³⁴⁷⁾、³⁴⁸⁾、³⁴⁹⁾、³⁵⁰⁾、³⁵¹⁾、³⁵²⁾、³⁵³⁾、³⁵⁴⁾、³⁵⁵⁾、³⁵⁶⁾、³⁵⁷⁾、³⁵⁸⁾、³⁵⁹⁾、³⁶⁰⁾、³⁶¹⁾、³⁶²⁾、³⁶³⁾、³⁶⁴⁾、³⁶⁵⁾、³⁶⁶⁾、³⁶⁷⁾、³⁶⁸⁾、³⁶⁹⁾、³⁷⁰⁾、³⁷¹⁾、³⁷²⁾、³⁷³⁾、³⁷⁴⁾、³⁷⁵⁾、³⁷⁶⁾、³⁷⁷⁾、³⁷⁸⁾、³⁷⁹⁾、³⁸⁰⁾、³⁸¹⁾、³⁸²⁾、³⁸³⁾、³⁸⁴⁾、³⁸⁵⁾、³⁸⁶⁾、³⁸⁷⁾、³⁸⁸⁾、³⁸⁹⁾、³⁹⁰⁾、³⁹¹⁾、³⁹²⁾、³⁹³⁾、³⁹⁴⁾、³⁹⁵⁾、³⁹⁶⁾、³⁹⁷⁾、³⁹⁸⁾、³⁹⁹⁾、⁴⁰⁰⁾、⁴⁰¹⁾、⁴⁰²⁾、⁴⁰³⁾、⁴⁰⁴⁾、⁴⁰⁵⁾、⁴⁰⁶⁾、⁴⁰⁷⁾、⁴⁰⁸⁾、⁴⁰⁹⁾、⁴¹⁰⁾、⁴¹¹⁾、⁴¹²⁾、⁴¹³⁾、⁴¹⁴⁾、⁴¹⁵⁾、⁴¹⁶⁾、⁴¹⁷⁾、⁴¹⁸⁾、⁴¹⁹⁾、⁴²⁰⁾、⁴²¹⁾、⁴²²⁾、⁴²³⁾、⁴²⁴⁾、⁴²⁵⁾、⁴²⁶⁾、⁴²⁷⁾、⁴²⁸⁾、⁴²⁹⁾、⁴³⁰⁾、⁴³¹⁾、⁴³²⁾、⁴³³⁾、⁴³⁴⁾、⁴³⁵⁾、⁴³⁶⁾、⁴³⁷⁾、⁴³⁸⁾、⁴³⁹⁾、⁴⁴⁰⁾、⁴⁴¹⁾、⁴⁴²⁾、⁴⁴³⁾、⁴⁴⁴⁾、⁴⁴⁵⁾、⁴⁴⁶⁾、⁴⁴⁷⁾、⁴⁴⁸⁾、⁴⁴⁹⁾、⁴⁵⁰⁾、⁴⁵¹⁾、⁴⁵²⁾、⁴⁵³⁾、⁴⁵⁴⁾、⁴⁵⁵⁾、⁴⁵⁶⁾、⁴⁵⁷⁾、⁴⁵⁸⁾、⁴⁵⁹⁾、⁴⁶⁰⁾、⁴⁶¹⁾、⁴⁶²⁾、⁴⁶³⁾、⁴⁶⁴⁾、⁴⁶⁵⁾、⁴⁶⁶⁾、⁴⁶⁷⁾、⁴⁶⁸⁾、⁴⁶⁹⁾、⁴⁷⁰⁾、⁴⁷¹⁾、⁴⁷²⁾、⁴⁷³⁾、⁴⁷⁴⁾、⁴⁷⁵⁾、⁴⁷⁶⁾、⁴⁷⁷⁾、⁴⁷⁸⁾、⁴⁷⁹⁾、⁴⁸⁰⁾、⁴⁸¹⁾、⁴⁸²⁾、⁴⁸³⁾、⁴⁸⁴⁾、⁴⁸⁵⁾、⁴⁸⁶⁾、⁴⁸⁷⁾、⁴⁸⁸⁾、⁴⁸⁹⁾、⁴⁹⁰⁾、⁴⁹¹⁾、⁴⁹²⁾、⁴⁹³⁾、⁴⁹⁴⁾、⁴⁹⁵⁾、⁴⁹⁶⁾、⁴⁹⁷⁾、⁴⁹⁸⁾、⁴⁹⁹⁾、⁵⁰⁰⁾、⁵⁰¹⁾、⁵⁰²⁾、⁵⁰³⁾、⁵⁰⁴⁾、⁵⁰⁵⁾、⁵⁰⁶⁾、⁵⁰⁷⁾、⁵⁰⁸⁾、⁵⁰⁹⁾、⁵¹⁰⁾、⁵¹¹⁾、⁵¹²⁾、⁵¹³⁾、⁵¹⁴⁾、⁵¹⁵⁾、⁵¹⁶⁾、⁵¹⁷⁾、⁵¹⁸⁾、⁵¹⁹⁾、⁵²⁰⁾、⁵²¹⁾、⁵²²⁾、⁵²³⁾、⁵²⁴⁾、⁵²⁵⁾、⁵²⁶⁾、⁵²⁷⁾、⁵²⁸⁾、⁵²⁹⁾、⁵³⁰⁾、⁵³¹⁾、⁵³²⁾、⁵³³⁾、⁵³⁴⁾、⁵³⁵⁾、⁵³⁶⁾、⁵³⁷⁾、⁵³⁸⁾、⁵³⁹⁾、⁵⁴⁰⁾、⁵⁴¹⁾、⁵⁴²⁾、⁵⁴³⁾、⁵⁴⁴⁾、⁵⁴⁵⁾、⁵⁴⁶⁾、⁵⁴⁷⁾、⁵⁴⁸⁾、⁵⁴⁹⁾、⁵⁵⁰⁾、⁵⁵¹⁾、⁵⁵²⁾、⁵⁵³⁾、⁵⁵⁴⁾、⁵⁵⁵⁾、⁵⁵⁶⁾、⁵⁵⁷⁾、⁵⁵⁸⁾、⁵⁵⁹⁾、⁵⁶⁰⁾、⁵⁶¹⁾、⁵⁶²⁾、⁵⁶³⁾、⁵⁶⁴⁾、⁵⁶⁵⁾、⁵⁶⁶⁾、⁵⁶⁷⁾、⁵⁶⁸⁾、⁵⁶⁹⁾、⁵⁷⁰⁾、⁵⁷¹⁾、⁵⁷²⁾、⁵⁷³⁾、⁵⁷⁴⁾、⁵⁷⁵⁾、⁵⁷⁶⁾、⁵⁷⁷⁾、⁵⁷⁸⁾、⁵⁷⁹⁾、⁵⁸⁰⁾、⁵⁸¹⁾、⁵⁸²⁾、⁵⁸³⁾、⁵⁸⁴⁾、⁵⁸⁵⁾、⁵⁸⁶⁾、⁵⁸⁷⁾、⁵⁸⁸⁾、⁵⁸⁹⁾、⁵⁹⁰⁾、⁵⁹¹⁾、⁵⁹²⁾、⁵⁹³⁾、⁵⁹⁴⁾、⁵⁹⁵⁾、⁵⁹⁶⁾、⁵⁹⁷⁾、⁵⁹⁸⁾、⁵⁹⁹⁾、⁶⁰⁰⁾、⁶⁰¹⁾、⁶⁰²⁾、⁶⁰³⁾、⁶⁰⁴⁾、⁶⁰⁵⁾、⁶⁰⁶⁾、⁶⁰⁷⁾、⁶⁰⁸⁾、⁶⁰⁹⁾、⁶¹⁰⁾、⁶¹¹⁾、⁶¹²⁾、⁶¹³⁾、⁶¹⁴⁾、⁶¹⁵⁾、⁶¹⁶⁾、⁶¹⁷⁾、⁶¹⁸⁾、⁶¹⁹⁾、⁶²⁰⁾、⁶²¹⁾、⁶²²⁾、⁶²³⁾、⁶²⁴⁾、⁶²⁵⁾、⁶²⁶⁾、⁶²⁷⁾、⁶²⁸⁾、⁶²⁹⁾、⁶³⁰⁾、⁶³¹⁾、⁶³²⁾、⁶³³⁾、⁶³⁴⁾、⁶³⁵⁾、⁶³⁶⁾、⁶³⁷⁾、⁶³⁸⁾、⁶³⁹⁾、⁶⁴⁰⁾、⁶⁴¹⁾、⁶⁴²⁾、⁶⁴³⁾、⁶⁴⁴⁾、⁶⁴⁵⁾、⁶⁴⁶⁾、⁶⁴⁷⁾、⁶⁴⁸⁾、⁶⁴⁹⁾、⁶⁵⁰⁾、⁶⁵¹⁾、⁶⁵²⁾、⁶⁵³⁾、⁶⁵⁴⁾、⁶⁵⁵⁾、⁶⁵⁶⁾、⁶⁵⁷⁾、⁶⁵⁸⁾、⁶⁵⁹⁾、⁶⁶⁰⁾、⁶⁶¹⁾、⁶⁶²⁾、⁶⁶³⁾、⁶⁶⁴⁾、⁶⁶⁵⁾、⁶⁶⁶⁾、⁶⁶⁷⁾、⁶⁶⁸⁾、⁶⁶⁹⁾、⁶⁷⁰⁾、⁶⁷¹⁾、⁶⁷²⁾、⁶⁷³⁾、⁶⁷⁴⁾、⁶⁷⁵⁾、⁶⁷⁶⁾、⁶⁷⁷⁾、⁶⁷⁸⁾、⁶⁷⁹⁾、⁶⁸⁰⁾、⁶⁸¹⁾、⁶⁸²⁾、⁶⁸³⁾、⁶⁸⁴⁾、⁶⁸⁵⁾、⁶⁸⁶⁾、⁶⁸⁷⁾、⁶⁸⁸⁾、⁶⁸⁹⁾、⁶⁹⁰⁾、⁶⁹¹⁾、⁶⁹²⁾、⁶⁹³⁾、⁶⁹⁴⁾、⁶⁹⁵⁾、⁶⁹⁶⁾、⁶⁹⁷⁾、⁶⁹⁸⁾、⁶⁹⁹⁾、⁷⁰⁰⁾、⁷⁰¹⁾、⁷⁰²⁾、⁷⁰³⁾、⁷⁰⁴⁾、⁷⁰⁵⁾、⁷⁰⁶⁾、⁷⁰⁷⁾、⁷⁰⁸⁾、⁷⁰⁹⁾、⁷¹⁰⁾、⁷¹¹⁾、⁷¹²⁾、⁷¹³⁾、⁷¹⁴⁾、⁷¹⁵⁾、⁷¹⁶⁾、⁷¹⁷⁾、⁷¹⁸⁾、⁷¹⁹⁾、⁷²⁰⁾、⁷²¹⁾、⁷²²⁾、⁷²³⁾、⁷²⁴⁾、⁷²⁵⁾、⁷²⁶⁾、⁷²⁷⁾、⁷²⁸⁾、⁷²⁹⁾、⁷³⁰⁾、⁷³¹⁾、⁷³²⁾、⁷³³⁾、⁷³⁴⁾、⁷³⁵⁾、⁷³⁶⁾、⁷³⁷⁾、⁷³⁸⁾、⁷³⁹⁾、⁷⁴⁰⁾、⁷⁴¹⁾、⁷⁴²⁾、⁷⁴³⁾、⁷⁴⁴⁾、⁷⁴⁵⁾、⁷⁴⁶⁾、⁷⁴⁷⁾、⁷⁴⁸⁾、⁷⁴⁹⁾、⁷⁵⁰⁾、⁷⁵¹⁾、⁷⁵²⁾、⁷⁵³⁾、⁷⁵⁴⁾、⁷⁵⁵⁾、⁷⁵⁶⁾、⁷⁵⁷⁾、⁷⁵⁸⁾、⁷⁵⁹⁾、⁷⁶⁰⁾、⁷⁶¹⁾、⁷⁶²⁾、⁷⁶³⁾、⁷⁶⁴⁾、⁷⁶⁵⁾、⁷⁶⁶⁾、⁷⁶⁷⁾、⁷⁶⁸⁾、⁷⁶⁹⁾、⁷⁷⁰⁾、⁷⁷¹⁾、⁷⁷²⁾、⁷⁷³⁾、⁷⁷⁴⁾、⁷⁷⁵⁾、⁷⁷⁶⁾、⁷⁷⁷⁾、⁷⁷⁸⁾、⁷⁷⁹⁾、⁷⁸⁰⁾、⁷⁸¹⁾、⁷⁸²⁾、⁷⁸³⁾、⁷⁸⁴⁾、⁷⁸⁵⁾、⁷⁸⁶⁾、⁷⁸⁷⁾、⁷⁸⁸⁾、⁷⁸⁹⁾、⁷⁹⁰⁾、⁷⁹¹⁾、⁷⁹²⁾、⁷⁹³⁾、⁷⁹⁴⁾、⁷⁹⁵⁾、⁷⁹⁶⁾、⁷⁹⁷⁾、⁷⁹⁸⁾、⁷⁹⁹⁾、⁸⁰⁰⁾、⁸⁰¹⁾、⁸⁰²⁾、⁸⁰³⁾、⁸⁰⁴⁾、⁸⁰⁵⁾、⁸⁰⁶⁾、⁸⁰⁷⁾、⁸⁰⁸⁾、⁸⁰⁹⁾、⁸¹⁰⁾、⁸¹¹⁾、⁸¹²⁾、⁸¹³⁾、⁸¹⁴⁾、⁸¹⁵⁾、⁸¹⁶⁾、⁸¹⁷⁾、⁸¹⁸⁾、⁸¹⁹⁾、⁸²⁰⁾、⁸²¹⁾、⁸²²⁾、⁸²³⁾、⁸²⁴⁾、⁸²⁵⁾、⁸²⁶⁾、⁸²⁷⁾、⁸²⁸⁾、⁸²⁹⁾、⁸³⁰⁾、⁸³¹⁾、⁸³²⁾、⁸³³⁾、⁸³⁴⁾、⁸³⁵⁾、⁸³⁶⁾、⁸³⁷⁾、⁸³⁸⁾、⁸³⁹⁾、⁸⁴⁰⁾、⁸⁴¹⁾、⁸⁴²⁾、⁸⁴³⁾、⁸⁴⁴⁾、⁸⁴⁵⁾、⁸⁴⁶⁾、⁸⁴⁷⁾、⁸⁴⁸⁾、⁸⁴⁹⁾、⁸⁵⁰⁾、⁸⁵¹⁾、⁸⁵²⁾、⁸⁵³⁾、⁸⁵⁴⁾、⁸⁵⁵⁾、⁸⁵⁶⁾、⁸⁵⁷⁾、⁸⁵⁸⁾、⁸⁵⁹⁾、⁸⁶⁰⁾、⁸⁶¹⁾、⁸⁶²⁾、⁸⁶³⁾、⁸⁶⁴⁾、⁸⁶⁵⁾、⁸⁶⁶⁾、⁸⁶⁷⁾、⁸⁶⁸⁾、⁸⁶⁹⁾、⁸⁷⁰⁾、⁸⁷¹⁾、⁸⁷²⁾、⁸⁷³⁾、⁸⁷⁴⁾、⁸⁷⁵⁾、⁸⁷⁶⁾、⁸⁷⁷⁾、⁸⁷⁸⁾、⁸⁷⁹⁾、⁸⁸⁰⁾、⁸⁸¹⁾、⁸⁸²⁾、⁸⁸³⁾、⁸⁸⁴⁾、⁸⁸⁵⁾、⁸⁸⁶⁾、⁸⁸⁷⁾、⁸⁸⁸⁾、⁸⁸⁹⁾、⁸⁹⁰⁾、⁸⁹¹⁾、⁸⁹²⁾、⁸⁹³⁾、⁸⁹⁴⁾、⁸⁹⁵⁾、⁸⁹⁶⁾、⁸⁹⁷⁾、⁸⁹⁸⁾、⁸⁹⁹⁾、⁹⁰⁰⁾、⁹⁰¹⁾、⁹⁰²⁾、⁹⁰³⁾、⁹⁰⁴⁾、⁹⁰⁵⁾、⁹⁰⁶⁾、⁹⁰⁷⁾、⁹⁰⁸⁾、⁹⁰⁹⁾、⁹¹⁰⁾、⁹¹¹⁾、⁹¹²⁾、⁹¹³⁾、⁹¹⁴⁾、⁹¹⁵⁾、⁹¹⁶⁾、⁹¹⁷⁾、⁹¹⁸⁾、⁹¹⁹⁾、⁹²⁰⁾、⁹²¹⁾、⁹²²⁾、⁹²³⁾、⁹²⁴⁾、⁹²⁵⁾、⁹²⁶⁾、⁹²⁷⁾、⁹²⁸⁾、⁹²⁹⁾、⁹³⁰⁾、⁹³¹⁾、⁹³²⁾、⁹³³⁾、⁹³⁴⁾、⁹³⁵⁾、⁹³⁶⁾、⁹³⁷⁾、⁹³⁸⁾、⁹³⁹⁾、⁹⁴⁰⁾、⁹⁴¹⁾、⁹⁴²⁾、⁹⁴³⁾、⁹⁴⁴⁾、⁹⁴⁵⁾、⁹⁴⁶⁾、⁹⁴⁷⁾、⁹⁴⁸⁾、⁹⁴⁹⁾、⁹⁵⁰⁾、⁹⁵¹⁾、⁹⁵²⁾、⁹⁵³⁾、⁹⁵⁴⁾、⁹⁵⁵⁾、⁹⁵⁶⁾、⁹⁵⁷⁾、⁹⁵⁸⁾、⁹⁵⁹⁾、⁹⁶⁰⁾、⁹⁶¹⁾、⁹⁶²⁾、⁹⁶³⁾、⁹⁶⁴⁾、⁹⁶⁵⁾、⁹⁶⁶⁾、⁹⁶⁷⁾、⁹⁶⁸⁾、⁹⁶⁹⁾、⁹⁷⁰⁾、⁹⁷¹⁾、⁹⁷²⁾、⁹⁷³⁾、⁹⁷⁴⁾、⁹⁷⁵⁾、⁹⁷⁶⁾、⁹⁷⁷⁾、⁹⁷⁸⁾、⁹⁷⁹⁾、⁹⁸⁰⁾、⁹⁸¹⁾、⁹⁸²⁾、⁹⁸³⁾、⁹⁸⁴⁾、⁹⁸⁵⁾、⁹⁸⁶⁾、⁹⁸⁷⁾、⁹⁸⁸⁾、⁹⁸⁹⁾、⁹⁹⁰⁾、⁹⁹¹⁾、⁹⁹²⁾、⁹⁹³⁾、⁹⁹⁴⁾、⁹⁹⁵⁾、⁹⁹⁶⁾、⁹⁹⁷⁾、⁹⁹⁸⁾、⁹⁹⁹⁾、¹⁰⁰⁰⁾、¹⁰⁰¹⁾、¹⁰⁰²⁾、¹⁰⁰³⁾、¹⁰⁰⁴⁾、¹⁰⁰⁵⁾、¹⁰⁰⁶⁾、¹⁰⁰⁷⁾、¹⁰⁰⁸⁾、¹⁰⁰⁹⁾、¹⁰¹⁰⁾、¹⁰¹¹⁾、¹⁰¹²⁾、¹⁰¹³⁾、¹⁰¹⁴⁾、¹⁰¹⁵⁾、¹⁰¹⁶⁾、¹⁰¹⁷⁾、¹⁰¹⁸⁾、¹⁰¹⁹⁾、¹⁰²⁰⁾、¹⁰²¹⁾、¹⁰²²⁾、¹⁰²³⁾、¹⁰²⁴⁾、¹⁰²⁵⁾、¹⁰²⁶⁾、¹⁰²⁷⁾、¹⁰²⁸⁾、¹⁰²⁹⁾、¹⁰³⁰⁾、¹⁰³¹⁾、¹⁰³²⁾、¹⁰³³⁾、¹⁰³⁴⁾、¹⁰³⁵⁾、¹⁰³⁶⁾、¹⁰³⁷⁾、¹⁰³⁸⁾、¹⁰³⁹⁾、¹⁰⁴⁰⁾、¹⁰⁴¹⁾、¹⁰⁴²⁾、¹⁰⁴³⁾、¹⁰⁴⁴⁾、¹⁰⁴⁵⁾、¹⁰⁴⁶⁾、¹⁰⁴⁷⁾、¹⁰⁴⁸⁾、¹⁰⁴⁹⁾、¹⁰⁵⁰⁾、¹⁰⁵¹⁾、¹⁰⁵²⁾、¹⁰⁵³⁾、¹⁰⁵⁴⁾、¹⁰⁵⁵⁾、¹⁰⁵⁶⁾、¹⁰⁵⁷⁾、¹⁰⁵⁸⁾、¹⁰⁵⁹⁾、¹⁰⁶⁰⁾、¹⁰⁶¹⁾、¹⁰⁶²⁾、¹⁰⁶³⁾、¹⁰⁶⁴⁾、¹⁰⁶⁵⁾、¹⁰⁶⁶⁾、¹⁰⁶⁷⁾、¹⁰⁶⁸⁾、¹⁰⁶⁹⁾、¹⁰⁷⁰⁾、¹⁰⁷¹⁾、¹⁰⁷²⁾、¹⁰⁷³⁾、¹⁰⁷⁴⁾、¹⁰⁷⁵⁾、¹⁰⁷⁶⁾、¹⁰⁷⁷⁾、¹⁰⁷⁸⁾、¹⁰⁷⁹⁾、¹⁰⁸⁰⁾、¹⁰⁸¹⁾、¹⁰⁸²⁾、¹⁰⁸³⁾、¹⁰⁸⁴⁾、¹⁰⁸⁵⁾、¹⁰⁸⁶⁾、¹⁰⁸⁷⁾、¹⁰⁸⁸⁾、¹⁰⁸⁹⁾、¹⁰⁹⁰⁾、¹⁰⁹¹⁾、¹⁰⁹²⁾、¹⁰⁹³⁾、¹⁰⁹⁴⁾、¹⁰⁹⁵⁾、¹⁰⁹⁶⁾、¹⁰⁹⁷⁾、¹⁰⁹⁸⁾、¹⁰⁹⁹⁾、¹¹⁰⁰⁾、¹¹⁰¹⁾、¹¹⁰²⁾、¹¹⁰³⁾、¹¹⁰⁴⁾、¹¹⁰⁵⁾、¹¹⁰⁶⁾、¹¹⁰⁷⁾、¹¹⁰⁸⁾、¹¹⁰⁹⁾、¹¹¹⁰⁾、¹¹¹¹⁾、¹¹¹²⁾、¹¹¹³⁾、¹¹¹⁴⁾、¹¹¹⁵⁾、¹¹¹⁶⁾、¹¹¹⁷⁾、¹¹¹⁸⁾、¹¹¹⁹⁾、¹¹²⁰⁾、¹¹²¹⁾、¹¹²²⁾、¹¹²³⁾、¹¹²⁴⁾、¹¹²⁵⁾、¹¹²⁶⁾、¹¹²⁷⁾、¹¹²⁸⁾、¹¹²⁹⁾、¹¹³⁰⁾、¹¹³¹⁾、¹¹³²⁾、¹¹³³⁾、¹¹³⁴⁾、¹¹³⁵⁾、¹¹³⁶⁾、¹¹³⁷⁾、¹¹³⁸⁾、¹¹³⁹⁾、¹¹⁴⁰⁾、¹¹⁴¹⁾、¹¹⁴²⁾、¹¹⁴³⁾、¹¹⁴⁴⁾、¹¹⁴⁵⁾、¹¹⁴⁶⁾、¹¹⁴⁷⁾、¹¹⁴⁸⁾、¹¹⁴⁹⁾、¹¹⁵⁰⁾、¹¹⁵¹⁾、¹¹⁵²⁾、¹¹⁵³⁾、¹¹⁵⁴⁾、¹¹⁵⁵⁾、¹¹⁵⁶⁾、¹¹⁵⁷⁾、¹¹⁵⁸⁾、¹¹⁵⁹⁾、¹¹⁶⁰⁾、¹¹⁶¹⁾、¹¹⁶²⁾、¹¹⁶³⁾、¹¹⁶⁴⁾、¹¹⁶⁵⁾、¹¹⁶⁶⁾、¹¹⁶⁷⁾、¹¹⁶⁸⁾、¹¹⁶⁹⁾、¹¹⁷⁰⁾、¹¹⁷¹⁾、¹¹⁷²⁾、¹¹⁷³⁾、¹¹⁷⁴⁾、¹¹⁷⁵⁾、¹¹⁷⁶⁾、¹¹⁷⁷⁾、¹¹⁷⁸⁾、¹¹⁷⁹⁾、¹¹⁸⁰⁾、¹¹⁸¹⁾、¹¹⁸²⁾、¹¹⁸³⁾、¹¹⁸⁴⁾、¹¹⁸⁵⁾、¹¹⁸⁶⁾、¹¹⁸⁷⁾、¹¹⁸⁸⁾、¹¹⁸⁹⁾、¹¹⁹⁰⁾、¹¹⁹¹⁾、¹¹⁹²⁾、¹¹⁹³⁾、¹¹⁹⁴⁾、¹¹⁹⁵⁾

居合道も剣道も同様であるが、動く技即ち知覚できる形式の中に、目に見えない「残心」が必ず必要であり、且つ技に織り込まれていることに着目したいのである。見事な舞踊のように動く形式としての芸術の中に感じられる精神的な何ものかはこの「残心」が同じ性格を持っていると考えるのである。

居合道においては特に「気位」の気風を重んずるが、このことは「残心」無くしては考えられないのであり、而もこの気風は一朝にして成るものではなく、長い歳月の修練を経て備わることは理論的に正しいと考える。尚居合道における「残心」動作は総べての技法そのものに密着しているので特に「無」の精神に近づくことを居合道では重要な鍛練目標にしているのである。

(3) 「静と動」

居合術に全々経験の無い人達が過去居合道高段者の演技を見るたびに、「誠に美しいもの」と筆者に語ったことが今にも耳底に残っているが、この美的感覚はどこから来ているのであろうか。過去筆者は見事な「舞」に引き付けられたことを今思い出しているが、このことはこの「舞」が完全に美的感覚を表現していたのであり、芸術的な言葉で簡単にいえば「虚の無い無心の動く形式」であったと考えられるのである。この「舞」が技法的には「速く、遅く、強く、弱く、見事な連繋作用と相俟って、その「舞人」の精神と心が見る人の心を引き付けるものと思われる。筆者はこの美しさを「静と動の織りなす見事さ」と表現したい。

居合道においては日本刀による必殺技を表現するのであるから、斬突そのことの技は勿論極めて峻厳なものでなければならないが、どの流派の演技を見ても筆者はただ単に峻厳性のみを感じ取ってはいない。この感じ方は居合術に経験の無い者も同様ではなかろうかと信ずる。居合道各種の「形」においては斬突時の技法そのことは寧ろ一部分であり、大部分は「残心」の分野における技法であると考えても論理的には誤りではないであろうと考える。

居合道技法を「動」という激しい動作と「静」という滑らかな動作とに分けると仮定すれば、「鞘ばなれ」動作と「斬突」動作は「動」に属し、それ以外の動作と「血ぶるい」から「納刀」に至る動作は「静」に属するものといえよう。そして各流派ともこれら「動と静」を見事に調和しているので、日本刀を自在に且つ無駄無く使い、「静と動」が恰かも一体として織り込まれている居合道演技の容姿は先述の見事な演舞に全く似ているものと考えたい。従って一般人も亦居合術の演技容姿に美的感を覚えるものと思われるのである。

この美的感覚を表現するためには峻厳な修練を経て円熟の域に達せねばならないし、この円熟の度が深まれば深まる程愈々美的感覚も深まるものと筆者は確信するのである。そして居合道の高段者ともなれば更に「静」も無く「動」も無い心境を体得したいと今も念じているに違いないし、事実この精進を続けているのである。

尚美的感覚で付言したいのは居合道における礼法である。自分を清めるとともに相手に失礼のない礼法については一般に剣道でいう「神」と道場に対する礼、「師」に対する礼、「同僚」に対する礼の三礼に、居合道では刀に対する「礼」も加えて、特に重要視し厳正で緻密な技法形式として表現することを義務づけられているので、演技の一部に加えられたこの礼法だけでもその見事さに一般人も感嘆するに違いないと筆者は信じている。

4. 居合道高段者の自覚

武道も含むあらゆるスポーツにおける必要な根本要素は、心身ともに健全であるということに誰も異論のある筈は無く、剣道界においてもこの道の愛好者は日常鋭意精進してい

るのであるが、表裏一体といわれる剣道と居合道夫々の近代的な考え方については少くとも成書類に関するかぎり、論理的に解明されているとは思われない。特に近時剣道の高段者でありながら居合道を修練しない者や、反対に居合道の高段者で剣道について極めて幼稚な者がいるということが生じて来ているので、この種の論理には無頓着状態に在るのではないかと考えられる。居合道の高段者は先ず剣道の深い理念的分野を徹底して理解すべきことが先決であるが、筆者は別観点から居合道高段者の心構えについて考えてみたい。

居合道指導者は初心者が殖えることについては無条件に喜ぶが、近時の若者は例外なく近代感覚の持主であるから、居合道については、剣道との関連において愛着心を持つか、あるいは居合術そのものの特別な修練を志す者以外は、居合道人口を殖やすことは容易ではない。茲において指導者は必然的に近代感覚を肯定する中で、実技においても論理的に信念づけねばならないのではないかと考えるのである。

居合道修練も、形の技法から始め、人間形成の精神要素涵養にまで目標を置いているが、精神要素涵養そのことの指導は大へんな難問題であり、修練者の自覚が第一とはいえ、重要なことは指導者自身が精神要素的なものを持ち合わせているかどうかということである。習技者に対し自己流で技業末節のことばかり教えたり、感情的に自分の意見を強要したりすることは本質に悖るものと考えべきで、居合道の深い理念からすれば寧ろ許されないことであろうし、自分が居合道の権威者であるかのような振舞いは習技者にとっては寧ろ、迷惑なもの的心得なければならない。筆者としては常に居合道修練の未熟さを反省しているとともに、居合道を芸術分野にその真理を追い続け、居合道の持つ芸術的意義の深さに魅せられている者である。そして同時に生命感の中に技法を創作されたという芸術の真理とも考えられる居合道を単なる伝統の技芸に終わらしめてはならないと常々考えている。

結 語

居合道の理念を芸術という深遠な問題と結びつけて論述することには当初大いなためらいを感じたのは事実であり、筆者としては自分の属する流派について教えられた技法を詳細に論じて批判を乞うのが筋道とも考えたが、古流各派とも居合道としての共通分野が大きいので、前書きの主旨に忠実であるべく敢えて理念を世に問うことを選んだ次第である。

ともあれ居合道の高段者は日常生活処世そのものも居合道理念から外れてはならないと考えるし、また居合道修練そのものも愈々円熟ならしめるために長い歳月をかけて精進せねばならないと思う。道は遠く、究めようとしても究め切れるものではないが、平常心を失わず終生修養に努めることが居合道人の宿命的課題であると信ずる。また、高段者は技術指導者としても論理的に剣道と居合道の考え方を曖昧にすることなく、且つ近代感覚もよく理解したうえで研鑽するという態度こそが世人の理解を一層深からしめることになるものと確信してしまない。このために芸術性として捉えた本稿が少しでも参考になるならば筆者としては大きな喜びである。

文 献

1. 小川金之助：「帝国剣道教本」。
2. 野出恒：「剣道読本」, 1937.
3. 戸伏太兵：「剣豪」, 1958.
4. 笹森順造：「剣道」。
5. 石川八代次：「剣道と学科」, 1967.
6. 松井三雄ほか：「体育測定法」, 1968.

7. 松川武堂：「剣道居合道学科審査問題」, 1969.
8. 広光秀国：「剣道必携」, 1971.
9. 原回光憲：「剣道の復活」, 1973.
10. 大島広太郎ほか：「剣道入門」, 1973.
11. 中村泰三郎：「居合剣道」, 1974.
12. S.K. ランガー著・池上保太訳・久野葛里訳「芸術」, 1974.
13. 福井勇：「日本剣道における近代的基本理念と技術の指導」 奈良大学紀要第3号1974.
14. 紀野一義：「禅」 1975.
15. 林屋辰三郎：「日本芸能の世界」 1976.

Summary

Every school of "Iaido" has much in common with one another, and in this thesis an attempt has been made to deal with various problems closely connected with the artistic in this common area. Since "Iaido" has not yet become very popular among the "Kendo" (Japanese fencing) favorers and there and have been practically no written documents as to the clarification of its modern ideas, the author has tried to take up some artistic aspects of "Iaido", first mentioning how to understand the modern "Iaido", and then examining what kind of things are related to the artistic in tricks of "Iaido", at the same time referring to the mental attitudes with which high ranking players in "Iaido" should behave.